

論文

テューダー朝における王室のアイデンティティと 宗教のアイデンティティ

—Ælfricの*Sermo de Sacrificio in Die Pascae*を手がかりとして—

武内 信一

要旨

ランカスター家の遠縁にあたるヘンリー・テューダー（ヘンリー7世）がボズワースの戦いでリチャード3世を破り、テューダー王朝を確立することで30数年に及ぶイングランドの内乱（薔薇戦争）に終止符を打った。

こうして成立したテューダー王朝ではあるが、ブリテン島に及びはじめていたルネサンスとプロテスタンティズムに象徴されるように、中世から近代に移り変わろうとする歴史の転換期にあつて、ヘンリー7世を襲った歴代のテューダー君主たちは宗教改革という時代の波に翻弄されることになる。

本論考では、アングロ・サクソンの聖職者アルフリッチ（Ælfric 955頃～1020頃）の説教‘*Sermo de Sacrificio in Die Pascae*’を手がかりとしてテューダー朝の政治・宗教的イデオロギーを考察することにより、ヘンリー8世治下の「国王付き好古家」ジョン・リーランド（John Leland 1506頃～1552）とエリザベス1世治下のカンタベリー大主教マシュー・パーカー（Matthew Parker 1504～1575）の行動が、それぞれ、テューダー朝における「王室の系譜的正統性」と「宗教的正統性」を捜し求めてゆく過程であったことを示すものである。

キーワード：「イングランドの国学」「薔薇戦争」「Antiquary」「John Leland」

It was the Tudor antiquarians and topographers such as John Leland, John Bale, and John Stow who first combined an interest in England with an interest in her old writers.

(*Medieval Writers and Their Work*. J.A. Burrow, p.122)

I

源平の争乱を髣髴とさせる中世末期におけるイングランドの薔薇戦争は本質的にはヘンリー6世をめぐる内紛に端を発する。しかし、ヘンリー6世がロンドン塔で殺害され、ひとり息子も殺害された上に王妃マーガレットまでもが追放されるに及んで、問題の本質はヨーク家とランカスター家による王位継承をめぐる争いへと変質した。やがて、ヨーク家のリチャード3世が混乱に乗じて王位につくが、ランカスター家の遠縁にあたるヘンリー・テューダー（ヘンリー7世）がボズワースの戦いでリチャードを破り、テューダー王朝を確立することで30数年に及ぶイングランドの内乱に終止符を打った。

こうして成立したテューダー王朝ではあるが、ブリテン島に及びはじめていたルネサンスとプロテスタンティズムに象徴されるように、中世から近代に移り変わろうとする歴史の転換期にあつて、ヘンリー7世を襲った歴代のテューダー君主たちは宗教改革という時代の波に翻弄されることになる。

本論考では、アングロ・サクソンの聖職者アルフリッチ（Ælfric 955頃～1020頃）の説教‘*Sermo de Sacrificio in Die Pascae*’を手がかりとしてテューダー朝の政治・宗教的イデオロギーを考察することにより、ヘンリー8世治下の「国王付き好古家」ジョン・リーランド（John Leland 1506頃～1552）とエリザベス1世治下のカンタベリー大主教マシュー・パーカー（Matthew Parker 1504～1575）の行動が、それぞれ、テューダー朝における「王室の系譜的正統性」と「宗教的正統性」を捜し求めてゆく過程であつたことを示したい。

II

‘*Sermo de Sacrificio in Die Pascae*’はアルフリッチの説教集*Ælfric's Catholic Homilies: The Second Series* (Godden 1979) に収められている40編の説教のなかの一つであり、タイトルの示すとおり、ヘブライ（ユダヤ）人たちの出エジプトを記念する祭りである「過越祭」の日のための説教として書かれたものである。その中心はカトリックの秘蹟の一つ「聖体の秘蹟（Sacrament of the Altar）」に関する解説である。「聖体の秘蹟」はカトリックの秘蹟のなかでも最も重要な秘蹟の一つであるが、いわゆるカトリックの7

秘蹟として確立したのは1274年の第2リヨン公会議においてである。また、その解釈も必ずしも歴史を通じて常に一定不変であったわけではなく、時として異端問題を生むこともあった（この問題については後述）。この「聖体の秘蹟」に関するアルフリッチの説教が、後代エリザベス1世が英国国教会を最終的に確立する際に、その教義上の正統性を主張するための論拠とされたのである。では、アルフリッチは「聖体の秘蹟」をどのように解釈しているのだろうか。

いわゆる「最後の晩餐」（「マタイによる福音書」26:26-29、「マルコによる福音書」14:22-26、「ルカによる福音書」22:19-20、「コリントの信徒への手紙1」11:23-25）で、受難を前にしたイエスが弟子たちに述べた言葉の解釈をめぐってアルフリッチは次のように説き始める。

Nu smeadon gehwilce men oft. and gyt gelome smeagað. hu se hlaf þe bið of corne gegearcod and ðurh fyres hætan. mage beon awend to cristes lichaman. oððe þæt win ðe bið of manegum berium awrunge. weorðe awend þurh ænigre bletsunge to drihtnes blode;

（麦から作られ、火で焼かれてできたパンがどうしてキリストの体になるのか、また多くのぶどうを搾って作られたぶどう酒がどうしてキリストの血になるのか）（部分訳筆者）¹⁾

おそらく修行経験の浅い修道士あるいは一般の平信徒を前にして行われたと考えられるこの説教では、上の疑問は当然の前提である。なぜパンがキリストの体となり、ぶどう酒がキリストの血に聖変化するのか。これに対するアルフリッチの答えは明快である。「キリストがパンと呼ばれるのは象徴（印）としてである。なぜならばキリストは我々の命だからである。」また、「キリストが子羊と呼ばれるのも無罪だからであり、レオと呼ばれるのも悪魔に打ち勝つ強さがあったからである。しかし、キリストはパンでもなければ、子羊でもなく、レオでもないのである。」²⁾

では、もし「聖体」がキリストでないならば、どうしてそれはキリストの体あるいは血と呼ばれるのであろうか。人間の感覚には、外見的には形も香りもパンとぶどう酒として映るが、聖別されたあと、信仰深い人間にとっては、内面的には別のものを語りかけているのである。アルフリッチは、具体的な例として、洗礼を受ける異教徒の子供の例を挙げる。「異教徒の子供が洗礼を受けたあと、内面では変化があったとしても、外面的には何の変化も起こらない。すなわち、洗礼を受けることにより罪を贖い内面の変化は起こるが、外面は以前と同じである」³⁾ というのである。洗礼に用いる聖水についても外見上はただの水となんら変わらないとも付け加える。

「聖体」についても、「物理的な認識しかなければ、はかなく移ろいやすい物体でしかないが、霊的な力を認識するならば、そこには命が存在することになり、信仰を持ってそ

のことを理解する者には永遠の命が与えられることになる」⁴⁾と結論付ける。基本的にはアルフリッチの聖体の秘蹟解釈は、実体においてキリストの体と血に変化するのではなく、あくまでも信仰に基づく霊的な意味において重要であるとするものである。十字架の上のイエスは人である。聖体は麦であり、物体に過ぎないのである。したがって、文字通りに(物理的に *lichamalice*) 解釈すべきではなく、信仰に基づいて、霊的に (*gastlice*) に理解すべき問題であるというのが彼の基本的解釈である。この点をアルフリッチは次のように述べる。

Hit is on gecynde brosnienlic hlaf. and brosnienlic win. and is æfter mihte godcundes wordes. soðlice cristes lichama and his blod. *na swa ðeah lichamlice. ac gastlice*

本質において聖体は移ろいやすいパンとぶどう酒であり、神の御言葉の力においてキリストの体と血になるのであるが、実態的にはなく霊的な意味においてである(イタリックス筆者)⁵⁾

すなわち、キリストと呼ぶ肉体はマリアの肉体から生まれた。血も骨も皮膚も筋肉も持って生まれた人間である。だから「我々が聖体とよぶ霊的な肉体は血も骨も肢も靈魂ももたないたくさんの麦から作られたものであるから、……文字通りではなく、霊的に理解しなくてはならないのである」とアルフリッチは説いているのである。⁶⁾

言い換えれば、聖体(化体)はパンとぶどう酒に存在するのではなく、信仰の中にのみ存在するということである。

III

アルフリッチとほぼ同時代、トゥールのベレンガリウス(1005-88)も同じような聖体解釈を展開していた。彼は『主の晩餐について (*De coena Domini*)』を書いて、聖体変化は純粹に霊的なものであり、物質としてのパンとぶどう酒がキリストの体と血に置き換わることはないと主張したのである。⁷⁾ すなわち、パンとぶどう酒が感覚的・物質的にキリストの体と血液になるわけではなく、その臨在は知性的・霊的な意味で理解されるべきであると説いたのである。⁸⁾ この考え方は後のローマの公会議(1050)やパリの公会議(1051)およびトゥールの教会会議(1054)など数々の教会会議で排斥された。⁹⁾ 最終的には1059年のローマ教会会議において、ベレンガリウスは「聖体に関するベレンガリウスの信仰宣言」を書き、「祭壇に捧げられたパンとぶどう酒は、聖別のあとに、秘蹟だけでなく、われわれの主イエズス・キリストの真の体と血であり、感覚的に、秘蹟の中だけでなく、真に司祭の手によって触れられ、割られ、信徒の歯によって噛み砕かれるものであ

る」¹⁰⁾ ことを宣言することになるのであるが、これは異端的信仰の実質的な撤回である。そして、ベレンガリウスは改悛の文書を書いただけで無罪放免になっているのである。この点に関してH. R. Lyonは次のように述べている。

Lanfranc in his earlier days won his reputation as a scholar for the vigour with which he defended the orthodox view of the real presence in the Eucharist against the new and ultimately unsuccessful theories of Berengar of Tour. . . . *Berengar's ideas were indeed, according to the thought of the age, truly heretical, but no significant party rallied around them.* (イタリックス筆者)¹¹⁾

このように12世紀以前のローマ教会は正統と異端に対する判断も、また秘蹟の数に対する態度もあいまいな状態であった。¹²⁾ ローマ教会が、明らかに異端的な思想を抱いていたベレンガリウスをこのように扱ったのも時代の状況を反映したものといえよう。アルフリッチもベレンガリウスも時代が時代であったならば、完全に異端者となりえたのである。D. ノウルズ (D. Knowles) もアルフリッチの「聖体の秘蹟」解釈は象徴主義者のそれであると主張し、後世のプロテスタンティズムの先駆としてベレンガリウスと同列に置いたうえで、次のように述べている。

The first unmistakable sign of the coming conflict was given by Berengar of Tours (d.1088) originally a pupil of Fulbert of Chartres. Theological preoccupations of modern times led for long to a totally unhistorical treatment of Berengar, *who was looked upon as the medieval protagonist of reform in the age-old Eucharistic controversy and as the predecessor (along with the English Ælfric) of Wyclif, Luther and Zwingli.* Historically speaking, the significance of Berengar does not lie in his precise views, which in any case were quite different from those of later controversialists, but in his resolute attempt to submit the mysteries of faith to treatment by dialectic. (イタリックス筆者)¹³⁾

アルフリッチに代表されるようなアングロ・サクソン教会の教義・秘蹟の解釈は神学的解釈というよりは哲学的・論理的な解釈であり、13世紀以降のローマカトリック教会の教義に照らせば異端である。ただ、先に言及したように、12世紀以前のローマカトリック教会の教義はシステムティックではなく、正統と異端の解釈もはっきりとしたものではなかった。ローマ教会の教義が確定を見るのは1215年の第4ラテラノ公会議、1274年の第2リヨン公会議等を経てからのことである。その間、聖体の秘蹟に関する教義に関しても、例えば、1265年に教皇クレメンス4世は「聖体におけるキリストの現存」という書簡をナルボンヌの大司教マウリヌスに宛て、「主イエズス・キリストの体は本質的には祭壇上には

実在せず、単に表象のもとに印として存在する……」というマウリヌスの言葉を厳に戒め、「パンとぶどう酒の形色のもとに、真に、実際に、実態的にわれわれの主イエズス・キリストの体と血が存在する」という「教会が一般に主張していること」を守らなければならないと説いている。¹⁴⁾ このクレメンスの言葉は、1215年の第4ラテラノ公会議の教令の第1章「カトリックの信仰について」の言葉そのものである。¹⁵⁾ このように、13世紀半ばまでにはローマ教会の教義は概ね確定していたのである。別な言い方をすれば、アングロ・サクソン教会の教義解釈(特に、聖体の秘蹟の解釈)については13世紀以降のローマカトリック教会の教義解釈とは全く異質のものであったということである。そして、テューダー朝の君主たちは、一方ではこのアングロ・サクソン教会に宗教の正統性を求め、また他方では、アングロ・サクソン以前のケルト・ブリトンの時代にまで遡って王室の連続性を求めようとするのである。

IV

ヘンリー 8世の離婚問題を契機にイングランドは、首長令 (The Act of Supremacy, 1534) を発して、ローマカトリック教会から分離・独立し、英国国教会 (the Church of England) を設立した。もちろん、この改革の主たる目的は政治的なものであり、神学的なものではなかった。この間、ヘンリー 8世はイングランドの修道院解散をおこない、聖職者の特権剥奪や修道院資産の没収をおこなっている。しかし、改革教会 (英国国教会) の教義に関しては全く旧態依然であり、ローマカトリック教会の教義となんら変わるころはなかった。実際、ヘンリー 8世は、一般にイングランド宗教改革の祖といわれる反面、プロテスタント改革者たちの教義を受け入れることはなかった。あくまでも彼はローマカトリックの教義を遵守し続けており、ローマカトリックの教義以外は異端と解釈していたのである。¹⁶⁾ このような状況において、ヘンリー 8世は1536年、さまざまな宗教論争を制御することを目的として、いわゆる「10か条」を発布する。本論のテーマである「聖体の秘蹟」に関わる部分を以下に引用してみる。

... as touching the sacrament of the altar, we will that all bishops and preachers shall instruct and teach our people committed by us unto their spiritual charge, that they ought and must constantly believe that *under the form and figure of bread and wine, which we there presently do see and perceive by outward senses, is verily, substantially, and really contained and comprehended the very self-same body and blood of our Saviour Jesus Christ, which was born of the Virgin Mary, and suffered upon the cross for our redemption, and that under the same form and figure of bread and wine, the*

テューダー朝における王室のアイデンティティと宗教のアイデンティティ

very self-same body and blood of Christ is corporally, really, and in the very substance exhibited, distributed and received of all them which receive the said sacrament; and that therefore the said sacrament is to be used with all due reverence and honour. . . . (イタリックス筆者)¹⁷⁾

まさにこれは、前節で見た第4ラテラノ公会議の教令そのものであり、いかにヘンリー8世が信仰の点では純粋なカトリック教徒であったかを如実に語るものである。(さらに、1538年には、新しく英語に翻訳されたばかりの聖書*The Great Bible*をすべての教会に整備するように命じ、Pater Noster, the Creed, the Ten Commandmentsをすべての信徒に暗唱するよう義務付けたほどである。)

従って、ヘンリー8世がアングロ・サクソン教会の教義解釈、特にアルフリッチの説教について関心や知識があったか否かは別としても、ローマと断絶し、設立されたばかりの英国国教会の教義的根拠を、聖体の秘蹟に関して解釈の異なるアングロ・サクソン教会に求めることはあり得ないことであった。

ヘンリー8世以来幾度となく反動を繰り返してきた英国国教会を実質的な意味で最終的に確立するためには、イングランドの宗教の歴史にはローマとは異なるはっきりとした独自の教義が存在していたことを証明しなければならない。エリザベス1世のもとで、この問題に取り組んだのが、当時のカンタベリー大主教マシュー・パーカー (Matthew Parker 1504-75) であった。

V

パーカーは、修道院解散を契機に散逸の危機にあった古典古代の本や写本などの史料を手元に集め、古代の歴史や実録を調査した。イングランドの教会が時代によってどのような状態にあったのかを克明に調べるためであった。彼は、その動機を1556年に出版した*A Testimonie of Antiquitie*という本の序文の中で次のように説明している。

And of such Sermons be yet manye bookes to be seene, partlye remayning in priuate mens handes, and taken out from monasteryes at their dissolution: partlye yet reserued in the libraryes of Cathedrall churches, as of Worcester, Hereford, and Exeter. *From which places diuerse of these bookes haue bene deliuered into the handes of the moste reuerend father, Mattheue Archbyshop of Canterburye, by whose diligent search for such writings of historye, and other monumentes of antiquitie, as might reueale vnto vs what hath ben the state of our church in England from tyme to tyme. . . .* (イタリックス筆者)¹⁸⁾

マシュー・パーカーは英国国教会の問題に決着をつけるために、イングランドにおける教会の歴史をくまなく調査した。その結果、「聖体の秘蹟」に関して、自分たちの主張を裏打ちするような記述がアングロ・サクソン教会の説教集にあることを発見するのである。

... here is set forth vnto thee a testimoneye of verye auncient tyme, wherin is plainly shewed what was the iudgement of the learned men in thys matter, in the dayes of the Saxons before the conquest. (ノルマン征服以前のサクソン人たちの時代に、この問題(聖体の秘蹟)に関して聖職者が下した判断が明確に示されている古代の証言をここに公刊するだけである。) (和訳筆者)¹⁹⁾

パーカーはエリザベス1世のもとで確立すべき英国国教会の教義上の根拠をアングロ・サクソン教会に発見した。そして、この正統性の主張を万人に認めさせるためには、アルフリッチの「説教」の内容を単に説明するのではなく、アングロ・サクソン時代の言葉(古英語)で書かれた文章をそのまま翻刻して出版することがもっとも効果的な手段であると判断したのである。

パーカーはこの目的のために、わざわざアングロ・サクソンのフォント(活字)をJohn Dayに造らせ、最終的に、*A Testimonie of Antiquitie shewing the auncient fayth in the Church of England touching the sacrament of the body and bloude of the Lord here publikely preached, and also receaved in the Saxons tyme, aboue 600. yeares agoe.* という長いタイトルの本を出版した。この本は左側にアルフリッチの説教を古英語のままに翻刻し、右のページにはパーカーによる当時の英語訳が付けられたものである。これに基づいて、イングランドが帰依してきたローマの教会(特に13世紀以降のローマカトリック教会の教義)こそが異端であり、ノルマン征服以前のアングロ・サクソン教会こそがイングランドが踏襲すべき正統な教会であると主張したのである。

宗教の正統性(あるいは連続性)を証明し、英国国教会の最終的な確立を目指した努力が、結果的には国学(アングロ・サクソン研究)に対する意識を生み出すことになった。パーカーの古英語研究グループの一人で、有能なラテン学者のジョン・ジョスリン(1529-1603)たちとともに、アングロ・サクソンの文献を次々に公刊したが、その中には1574年に出版されたアッサー(Asser d909)の『アルフレッド大王伝(*Ælfrēdi Regis Res Gestae*)』も含まれている。

他には、ランバード(William Lambarde 1536-1601)の『古代法(*Archaionomia*)』、ジョン・フォックス(John Foxe 1516-87)による古英語の福音書の編纂などが挙げられるが、詳しくは別の機会に譲ることにしたい。²⁰⁾

VI

時代は前後するが、テューダー朝が求めたもう一つのアイデンティティ「王室の正統性」へ話題を転じてみたい。ボズワースの戦いに勝って、王位を手に入れたヘンリー7世にとって、根本的な関心事はテューダー王朝の系譜的正統性を創り上げることであった。長男アーサー（1486-1502）の名前が示すように、ウェールズに系譜的ルーツをもつテューダー家においては、（伝說的）アーサー王とのつながりを何らかの形で示すことは政治的な保障として必要なものであった。（逆に言えば、大陸から進入してきたアングロ・サクソンの王室と系譜的に同調することは矛盾することであったともいえる。）Seth Lererはこの点に関して次のように述べる。

Prince Arthur's birth in 1486 had focused both political and poetic energies on confirming the legitimacy of Henrician rule. To celebrate the prince's birth . . . and to legitimate the succession of a dynasty founded more by force of battle than by birthright—Henry VII commissioned poems of praise from his laureates. . . . Arthur's birth, while it may have resonated with an earlier Arthurian glory and affirmed Henry's claims to ancient lineage, was pressed into the service not of British myth-making but of classicizing ideology.²¹⁾

しかし、期待された長男アーサーはアラゴンのキャサリンと結婚後まもなく16歳という若さで夭折、弟のヘンリーが兄嫁のキャサリンと結婚することになる。こうしてテューダー家を継いだヘンリー8世ではあったが、世継ぎの問題からキャサリン王妃との離婚問題が発生し、さらにそれがテューダー・イングランドにおける宗教改革の引き金となってゆくのである。

このように公的にも私的にも混乱した状況にある中で、ヘンリー8世は政治的な動機から修道院を解散することになる。しかし、その文化遺産の保護をにらんで、彼はジョン・リーランドを「国王付き好古家 (King's antiquary)」に任命し、全国の修道院、学寮の書庫・図書館の調査を命ずるが、その目的の1つはテューダー家の系譜を史料的に裏付けることであった。

ジョン・リーランドはSt. Paul's Schoolで教育を受け、わずか16歳でケンブリッジ大学のChrist's Collegeで学士号を得ている。その後、オックスフォード大学のAll Souls Collegeやパリ大学で勉学を続けた後、ラテン、ギリシャはもちろんのこと、フランス語、スペイン語、イタリア語、その他数多くのゲルマン語を習得して帰国している。²²⁾ その直後の1533年に前述の「国王付き好古家 (King's Antiquary)」に任命されたのである。そ

のときの様子を、ジョン・ベイル (John Bale 1495–1563) は次のように述べている。

Not only marked he (Henry VIII) the natural inclinacyon of this Leylande, but also prouoked him to folowe it in effect, to the conseruacion of the landes Antiquitees whyche are a most syngulare bewtye in euery nacyon. *He gaue hym out his autorite and commission, in the year of oure Lorde 1533 to serche and peruse the Libraries of hys realme in monasteries, couentes, and colleges, before their vtter destruccyon, whyche God then appointed for their wyckednesses sake.* (イタリックス筆者)²³⁾

リーランドは政治的な人間ではなく、古典古代の学問に対して純粋な情熱と並外れた能力をもつ学徒であることを、ヘンリー 8 世は見抜いていた。そして調査の権限と職権を自ら彼に与えたのである。翌年の 1534 年から 1543 年ごろまでのおよそ 9 年間、彼は全国の修道院、学寮、の図書館をくまなく調査して回り、克明な記録に纏めている。この記録の全体はリーランドの存命中に刊行されることはなかったが、*De Rebus Britannicis Collectanea 6 vols.* として 1776 年に公刊された。

調査の旅から戻った翌年の 1544 年に、リーランドは *Assertio Inclytissimi Arturii* を著しているが、これはまさしくイングランドの王家の起源が、ギルダス (Gildas) やベダ (Bede) の歴史記述からもれた、アングロ・サクソン人侵入以前のブリトンにまで遡ることを示そうとするものである。小林 (2001) によれば、それは「主権国家としてのイングランドの威信を高めるような過去の再構築を目指したもの」²⁴⁾ ということになるが、もっと直接的に言えばチューダー王家に相応しい王室のアイデンティティを主張するための努力に他ならない。熱烈にヘンリー 8 世を慕うリーランドにとって、イングランドの原初、すなわち、ブリトンのアーサー王まで王室の歴史を遡って証明することは最大の関心事であった。その情報を彼はジェフリー・オブ・モンマス (Geoffrey of Monmouth c1100–c1154) の『ブリタニア諸王史 (*Historia Regum Britanniae*)』に求めたのである。²⁵⁾ そして、スティーブン王 (c1097–1154) の後を襲ったヘンリー 2 世 (1133–1189) がアーサー王の実在を信じて系譜をたどろうとしたように、リーランドもヘンリー 8 世に同じような姿を重ね合わせていたのである。ヘンリー 2 世が吟遊詩人からアーサー王の墓がグラストンベリー修道院に存在していることを耳にするくだりを、リーランドは次のように記述するのである。

Truly there was one amongst the rest most skillfull in knowledge of Antiquitie. He so sunge the praises and noble actes of Arthure comparing Henry with him as Conquerour in time to come for many respectes, that hee both wonderfully pleased, & also delighted

テューダー朝における王室のアイデンティティと宗教のアイデンティティ

the Kinges eares: at what time also *the King learned this thing especially of the historical singer, that Arthure was buried at Aualonia in the religieuse place.* (そのとき、ヘンリー2世はアーサーがアヴァロン（グラストンベリーと同定される）の修道院に埋葬されていることを詩人の話から知るのである。)(イタリックス、和文要約筆者)²⁶⁾

1544年に*Assertio Inclytissimi Arturii*を著してからさらに2年後の1546年には、リーランドは、ほぼ9年間にわたって全国を調査旅行して集めた資料をもとにしてまとめた小論文‘New Yeares Gyfte’をヘンリー8世に献上している。その冒頭で彼は調査旅行を命じられたときの様子にふれ、その目的を次のように述べている。

... to the entent that *the monumentes of anuncyent wryters, as wel of other nacyns as of your owne prouynce, myghte be brought out of deadly darkenesse to lyuelye lyght,* and to recyeye lyke thankes of their posteryte as they hoped for at suche tyme, as they employed their longe and great studyes to the publyque wealthe. (自国はもちろん、他国のものも含めて、古典古代作家の作品を闇の中から生きた光の中に取り戻すこと。イタリックス、部分和訳筆者)²⁷⁾

こうして、リーランドは、全国各地の修道院や学寮で、いまや見向きもされずに埃をかぶって眠っているだけの古代の偉大なる文化遺産を掘り起こし、もう一度国家のために光を当てる使命を帯びて調査に出たのである。献上した‘Newe Yeares Gyfte’それ自体は全国各地の修道院や学寮に眠る古典古代の史料や作家を発見し記録したこと、その克明な内容を膨大な数の本にまとめ上げる計画であることなどが書かれているが、結果的にはリーランドの計画は実現されることはなかった。ヘンリー8世が世を去った1547年の翌年、リーランドは理性を失い、1552に世を去ったからである。

この間、本論のテーマであるジョン・リーランドとマシュー・パーカーをつなぐ人物が登場する。ジョン・ベイル(1495-1563)である。彼はもともとカルメル修道会士であったが、1533年にプロテスタントに改宗した人物で、きわめて急進的な宗教改革論者であった。²⁸⁾ リーランド発狂後の1549年に、ベイルは‘Newe Yeares Gyfte’を利用して、腐敗したカトリックを批判するように序文や本文解説を加えて本として出版した。それが*The Laboryouse Journey and Serche of Johan Leylande for Englandes Antiquitees*である。リーランドが全国をくまなく歩いて調べ上げた古代の遺産や作家名を巻末にまとめ(ベイル自身も後に別刷本として古典古代の作家目録を出版している)、プロテスタント改革を進める英国国教会のプロパガンダとして利用したのである。

こうして、本来、王家の正統性を裏付けようと努力したジョン・リーランドの精神は、

急進的改革者のジョン・ベイルによって宗教の正統性を求める運動に利用され、イングランドに関わる古典古代の史料とともにマシュー・パーカーに受け継がれていった。そして、これら3者のそれぞれの活動が結果的にはイングランドにおける国学の発達を促す端緒となったのである。 (2003.9.2)

注

- 1) Godden (1979), p.152.
- 2) *ibid.*, p.153.
- 3) *ibid.*, p.152.
- 4) *ibid.*, p.153.
- 5) *ibid.*, p.154.
- 6) *ibid.*, p.154.
- 7) ノウルズ, D. (1996), p.56.
- 8) 大貫 隆 (他編) (2002), p.1024.
- 9) デンツィンガー, H (1974), p.159.
- 10) 同上, p.160.
- 11) Lyon, H. R. (2000), p.139.
- 12) 今野國雄 他(1976), p.191.
- 13) Knowles, D. (1962), pp.150-160.
- 14) デンツィンガー, H (1974), p.197.
- 15) 同上, p.185.
- 16) St. Clare, M. (1936), pp.236-240.
- 17) *ibid.*, p.240.
- 18) *A Testimonie of Antiquite.* (1566), pp.2-3.
- 19) *ibid.*, pp.2-3.
- 20) 小野 茂. (2003), p.184.
- 21) Wallace, D. ed. (1999), p.736.
- 22) *DNB* (1908-09).
- 23) *The Laboryouse Journey* (1549).
- 24) 小林宣子 (2001), p.85
- 25) Christopher Middleton (1925), p.17.
- 26) *ibid.*, p.67.

- 27) *The Laboryouse Journey* (1549)
28) 武内信一 (2003a), pp.1-3, (2003b), pp.1-3.

参考文献

- Ælfric. A Testimonie of Antiquite, The English Experience* No. 214, published in facsimile by Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1970.
- Bale, John. *The Vocacyon of Johan Bale*. Medieval & Renaissance Texts & Studies Vol.70. Peter Happe & John N. King (eds.), 1989.
- Byrne, M. St. Clare. ed. *The Letters of King Henry VIII, a selection, with a few other documents*, Funk & Wagnalls, 1968.
- Elstob, Elizabeth. *The Rudiments of Grammar for the English-Saxon Tongue*. London, 1715.
- Frantzen, J. Allen. *Desire for Origins: New Language, Old English, and Teaching the Tradition*. Rutgers University Press, 1990.
- Geoffrey of Monmouth. *The History of the Kings of Britain*, (translated by Lewis Thorpe), Penguin Books, 1966.
- Godden, Malcolm. ed. *Ælfric's Second Series of Catholic Homilies*. EETS (SS.5), 1979.
- Graham, Timothy. ed. *The Recovery of Old English: Anglo-Saxon Studies in the Sixteenth and the Seventeenth Centuries*. Medieval Institute Publications. West Michigan University, 2000.
- Knowles, David. *The Evolution of Medieval Thought*. Helicon Press. 1962.
- 小林宣子「イングランド宗教改革期における過去の再構築—ジョン・リーランドとジョン・ペイルのテキストをめぐって—」『シリーズ言語態 4 記憶と記録』白井隆一郎・高村忠明 (eds.), 東京大学出版会, 2001.
- 今野國雄 (他)『西欧精神の探求〜革新の12世紀』NHKライブラリー, 1976.
- Leyland, John. *The Laboryouse Journey & Serche for Englandes Antiquitees*, originally published in 1549, *The English Experience* No. 750, published in facsimile by Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1975.
- *De Rebus Britannicis Collectanea* 6 vols. Originally published in 1776, republished by Gregg International Publishers Limited, 1970.
- Loyn, H. R. *The English Church 940-1154*. Longman. 2000.
- Middleton, Christopher. ed. *The Famous Historie of Chinon of England together with The Assertion of King Arthure*, EETS os.165, 1925.
- ノウルズ, D. 『キリスト教史 (4)』平凡社, 1996.
- 大貫 隆 (他編)『岩波キリスト教辞典』岩波書店, 2002
- 小野 茂「歴史の中の古英語とアングロ・サクソン・イングランド」『学苑』752号, 昭和女子大学・英米文学紀要, 2003.

- ジンマーマン・A (監修) 浜 寛五郎 (訳), 『カトリック教会文書資料集』エンデルレ書店, 1974.
- Stephen, Leslie & Sidney Lee. eds. *The Dictionary of National Biography*. 2nd edn., 22 vols. London: Smith, Elder, 1908-09.
- 武内信一 ‘The Laboryouse Journey and Serche of Johan Leylande for Englandes Antiquitees: A Diplomatic Edition with Notes and Glossary (I)’ 『文学論叢』第127輯. 愛知大學文学会, 2003. 2.
- ‘The Laboryouse Journey and Serche of Johan Leylande for Englandes Antiquitees: A Diplomatic Edition with Notes and Glossary (II)’ 『文学論叢』第128輯. 愛知大學文学会, 2003. 7.
- Wallace, David. ed. *The Cambridge History of Medieval English Literature*. Cambridge University Press, 1999.
- Woodward, G. W. O. *The Dissolution of the Monasteries*. Walker and Company, 1966.